日常的な災害対策に向けた樋井川流域の「ミズベリング」の試み

九州産業大学工学部　学生会員　○松木沙弥香　　九州産業大学工学部　正会員　山下三平
九州大学大学院工学研究院　竹林知樹　　九州産業大学工学部　学生会員　若杉智史

1. はじめに

1-1. 背景

福岡市の中心を流れる二級河川樋井川は平成 21 年 7 月中国･九州北部豪雨により内･外水氾濫し、沿川の 410 戸が浸水被害を被った。これを受けて、同年 10 月に樋井川流域で生活・事業を営む人々が協力して治水対策を行うために、「樋井川流域治水市民会議」が発足した。平成 27 年 12 月までに 45 回の「市民会議」が開催され、雨水タンクの集中的な設置、浸水深サインの掲示、水害避難ガイドブックの作成など、一定の成果を得ることができた。しかし、水害から約 6 年を経ると、当初の熱気が薄れ、参加者の減少や固定化が課題となった。水害対策という非日常の出来事への対策を、いかに日常的な活動として実践していくかが問われることとなった [1]。樋井川流域に限らず、災害対策の日常化は、いずれの地域でも重要な課題であろう。

1-2. 目的

そこで本研究は、「市民会議」以降に樋井川流域で行われた「日常化」の取り組みについて報告する。その上で、都市型水害対策の持続可能性の課題を追究する。

2. 分散型水管理とミズベリング

都市型水害対策は分散型の水管理による流出抑制が本質である [2]。その実効性の向上には、できるだけ多くの市民が気軽に参加できる魅力ある仕組みが不可欠である。本研究ではそのために「ミズベリング」を活用することとした。

ミズベリングは平成 26 年に国交省が、水辺に対する社会の関心を高め、様々な立場からの参画を得るための取り組みを推進していく登録制のプロジェクト [3] として始めた。その登録要件は、(1)地域の創意としての「知恵」を活かした計画、(2)利活用方策が地域において明確となっているもの、(3)施設の維持管理に地域の協力が得られるもの、であり [4]、条件が少なく規制の緩いプロジェクトである。登録されたプロジェクトの活動を当該ウェブサイトで調査したところ、図-1 のように分類される。「1 日以内」はカヌーや生物調査等、「1 日以上 1 週間以内」はマーケット等、「1 週間以上半年以内」はライトアップ等、「定期的」は清掃活動等といった活動である。短期的な活動が過半数を占め、定期的に活動を行っているのは全体の約 1 割と少ないことが分かる。

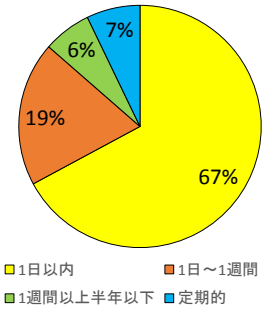

図-1　全国のミズベリング活動期間の調査結果

3. ミズベリング樋井川の歩み

平成 28 年 5 月より、樋井川では「ミズベリング樋井川 [5]」として登録し、同年 12 月までに 6 回会議を行っている。その概要は表-1 のとおりである。

表-1　ミズベリング樋井川会議のこれまでの取り組み

会議	年月日	場所	人数	内容
第1回	2016年4月23日	そばチカ	25名	・ミズベリング樋井川の設立 ・7/7「水辺で乾杯！」をすること
第2回	2016年5月27日	長尾公民館長尾公民館	31名	・「水辺で乾杯！」は個別の会場で行う ・7/7の報告会を行い、シェアすること
第3回	2016年7月1日	長尾公民館	33名	・「水辺で乾杯！」の準備について
	2016年7月7日	ハミングロード下長尾北公園、ほんやかフェにじいろ上長尾テラス あめにわ憩いセンター	約200名	「水辺で乾杯！」
第4回	2016年8月31日	福岡大学	33名	・「水辺で乾杯！」報告会 ・今後どのようにこの集まりを生かすのか（WS形式）
第5回	2016年10月28日	ほんやかフェにじいろ	37名	・ウォーキングコースの提案 ・第1回学習会：雨水浸透、活用の実践計画
第6回	2016年12月22日	上長尾テラス	23名	・プレ樋井川さんぽ ・第2回学習会：雨水タメルンジャーZ

3-1. ミズベリング樋井川の設立と「水辺で乾杯！」

第 1 回から第 3 回会議までは、主にミズベリング樋井川を正式に設立することと、後述の「水辺で乾杯！」の準備について話し合いが行われた。

当初は、自治会との連携がうまく取れず、参加者に不安や困惑が広がり、一時不穏な空気が流れた。しかし、「水辺で乾杯！」を行うという一つの目標ができたことで一気に場が和み、話し合いが進んだ。「水辺で乾杯！」はミズベリングプロジェクト全体の共通イベントで毎年 7 月 7 日午後 7 時 7 分に一斉に乾杯するものである。共通のルールとしては、青色の物を身に着けることが決まっている。樋井川では上記のルールに加え、自然を意識した緑色の物を身に着けるルールも設けた。会場は、上流から下流に向けて流域内 5 会場を設定し、一

体感を出すため、スカイプ中継を行った。また、七夕ということで、短冊に願い事を書いた。5 会場合わせて約 200 名もの人々が参加した（図-2）。地域の自治会が積極的に取り組んだことで、子供たちや主婦、通りすがりの人まで幅広く参加し、地域を巻き込むイベントができた。このイベントから、樋井川流域の研究について知らなかった人にも、ある程度周知することができた。また、短冊には、「樋井川がきれいになりますように」「樋井川で遊びたい」といった内容が複数件見られた。樋井川への関心が読み取れる。

3-2. 学習会と樋井川さんぽ

第 4 回会議において、今後どのようにこの集まりを生かすのか、というテーマでワークショップが行われた。これは短期的なイベント中心の活動でない、持続的な取り組みを目指すためである。ワークショップの結果、「川を知る」「川を使う」「地域のつながり」「防災・暮らし・雨水」という 4 つのキーワードがまとめられた。「川を知る」に基づいて、まず手はじめに学習会と「樋井川さんぽ」を実行することが決まった。学習会は、第 5 回と第 6 回の会議で行われた。学習会を行ったことで、雨水の浸透や活用技術などについて学ぶことができた。また、大学生による「あまみずタメルンジャーＺ」という戦隊もののヒーローショーを活用して、子供たちや親への啓発を行った。

「樋井川さんぽ」については、第 5 回会議でコースマップを提案し（図-3）、第 6 回会議の前に「プレ樋井川さんぽ」として集まった 10 名で実際にこのコースを歩いた。早瀬工・バーブ工から鳴る川のせせらぎの音やカフェ、公園、神社など、片道約 2km の短いコースにもかかわらず、多くのスポットを見かけることができた（図-3）。「樋井川さんぽ」を広く実施することで、新たな魅力を普及・啓発するきっかけになると考えられる。

4. まとめと考察

樋井川では地域の人々と直接連携を図り、日常的な活動をつなぐ場として、ミズベリングを試みている。持続的な取り組みを行うために始めた学習会や「樋井川さんぽ」では、老若男女、市民から行政や企業まで幅広く交流を深めながら学ぶことができつつある。また、一部の地元のカフェでは、雨水貯留タンクの設置も始まった。しかし、「水辺で乾杯！」の参加者の多数と積極的に取り組みを行った自治会の多くの人々は、ミズベリング樋井川会議へ参加しておらず、流域全体での災害対策は途半ばというのが現状である。「水辺で乾杯！」は大いに成功したと考えられるが、その後の取り組みとして、啓発から技術適用の拡大へと、いかに持続的にできるかが重要である。

図-2　ミズベリング樋井川「水辺で乾杯！」5 会場の様子

図-3　「樋井川さんぽ」のコースマップ

謝辞：本研究は JST-RISTEX[6] の研究プロジェクト（分散型水管理を通した、風かおり、緑かがやく、あまみず社会の構築 平成 27 年 10 月採択）として行われたものである。

参考文献

1) 山下三平：樋井川治水市民会議の取り組みと展開, 水循環・貯留と浸透99, pp35-38, 2016.

2) あまみず社会研究会 http://amamizushakai.wixsite.com/amamizu

3) MIZBERING http://mizbering.jp/

4) 国土交通省水管理・国土保全局河川環境課：水辺とまちの未来創造について, http://www.zenken.com/kensyuu/kousyuukai/H27/620/620_dozono.pdf

5) ミズベリング樋井川 https://www.facebook.com/mizberinghiikawa/

6) RISTEX 社会技術研究開発センター http://ristex.jst.go.jp/